

## 叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXII) <sup>1</sup>—

茂木秀淳 社会科学教育講座

キーワード：モークシャダルマ、ダルマ、ジャージャリ、不殺生

[251 章] (=D.259 章、9229-9256, K.265 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) この世の人間は皆、ダルマについて、「このダルマとは何か。ダルマはどこからきたのか」という疑問をもっている。それを私に語るべし、祖父よ。
- (2) 一体このダルマはこの世のためにあるのか。あの世のためにあるのか。あるいは両方のためなのか。それを私に語るべし、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (3) 善行 (sad-ācāra)、伝承聖典 (smṛti)、天啓聖典は三種のダルマの目印 (lakṣaṇa) である。第四のダルマの目印は (善行の?) 目的であると<sup>2</sup>、賢者 (kavi) たちは言った。
- (4) (聖典中に) 述べられた行為が (?)<sup>3</sup>(人の) 上下を<sup>4</sup>分けるのである。この世での人々の行為 (lokyātrā) のためにダルマの規定 (niyama) は作られた。(ダルマは) この世とあの世の両方で安楽を生じるものである。
- (5) 完全なダルマを獲得しなければ、罪は罪に至る<sup>5</sup>。そして、罪を為す者は、罪から解放されることはない。ある人々によれば、窮迫時にも<sup>6</sup>、
- (6) 罪なきことを語る時、人はダルマを知る者<sup>7</sup>となるという。ダルマの基盤<sup>8</sup>は自分の振舞い<sup>9</sup>である。それのみに基づいて、汝は (果報を) 享受するであろう。

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXI)—』(信州大学教育学部研究紀要第 105 号 2002 年 3 月) に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いるものは以下のとおりである。

- Hopkins[Great Epic]: E. W. Hopkins, *The Great Epic of India, Its Character and Origin*, 1901, Reprint Calucetta 1978.
- Hopkins[1902]: E. W. Hopkins, *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS vol.23, pp.109-155, 1902.
- Proudfoot [1987]: I. Proudfoot, *Ahiṃsā and a Mahābhārata Story, The Development of the Story of Tulādhāra in the Mahābhārata in connection with Non-violence, Cow protection and Sacrifice*, Asian Studies Monographs, new series no.9, Faculty of Asian Studies, Australian National University, Canberra, 1987.
- Hara [1997]: Minoru Hara, *A Note on Dharmasya Sūkṣmā gatiḥ*, Poznań Studies in the Philosophy of the Sciences and the Humanities, Vol.59, 1997, pp.515-532.
- 中村 [1998]: 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法原典解明」(上) 平楽寺書店 1998.
- 原 [1998]: 原実『不殺生考』国際仏教学大学院大学紀要第 1 号 平成 10 年 3 月、pp.1-37.

<sup>2</sup>P.,D.: caturtham artham ity K. caturtham artham apy Cs. artham arthasāstram daṇḍanīyākhyam / Deussen: der gewollte Zweck

<sup>3</sup>P.: api hy uktāni karmāṇi D. api hy uktāni dharmyāṇi K. avidhyuktāni karmāṇi Cs. (avidhyuktāni) vidhir vedaḥ, tadanyo buddhāgamo vidhiḥ, tenoktāni caityavandanādīni /

<sup>4</sup>P.,D.: uttarāvare K. uṣṭamūṣare

<sup>5</sup>P.,K.: pāpaḥ pāpe prasajjati D. pāpaḥ pāpena yujyate

<sup>6</sup>na ca pāpakṛtāḥ pāpān mucyante kecid āpadi / MBh.1.251.5 2つの複数主格 pāpakṛtāḥ と kecid の関係がはっきりしない。両者とも mucyante の主語ならば、後半の d 句は「ある人々は窮迫時においても罪から解放されることはない」という意味になるか。Nīlakaṇṭha は、「ある人々は言った」と言葉を補って、次の詩節に関連させて理解している。 N. kecid ity āhur iti śeṣaḥ / āpadi tu yathā pāpavādy apy apāpavādī bhavati, adharmakṛd api dharmakṛd bhavati /

<sup>7</sup>P. yadā bhavati dharmavit D. yathā bhavati dharmakṛt K. yathā bhavati dharmavit

<sup>8</sup>niṣṭhā Cs. niṣṭhā nirṇayaḥ /

<sup>9</sup>P.,K.: svācāras D. tv ācāras

- (7) アダルマに染まった盗賊が富を取り、泥棒が他人の財産を奪いつつ王なき状態に喜ぶ時、
- (8) 他の泥棒どもがこの者のそれ(富)を奪う時、人は王を願ひ、自分の財産で満足している人々を羨む。
- (9) 清浄な者は恐れも疑念もなく王の門に近づく。(彼は)いかなる悪行も (duścariṃ) 自分の中に (antar-ātmani) 見ないからである。
- (10) 真実 (satya) の言葉は善 (sādhu) である。真実より高きものはない。真実によって一切は維持され、一切は真実に基盤をおいている。(Cf. MBh.III.303.42ab, VIII.49.27ab, XII.110.4ab)
- (11) また罪を為す悪しき人々も<sup>10</sup>それぞれ真実を行った後には、それに基づいて、悪意なく、約束を反古にすることもない。もし彼らが互いに(約束を)堅持しないならば<sup>11</sup>、疑いなく破滅するであろう。
- (12) 「他人の富を奪うべからず」とは永遠なるダルマである<sup>12</sup>。力ある者たちは、それを力弱き者によって提唱されたと考える。しかし運命によって無力になるとときには<sup>13</sup>、彼らこそが(このダルマを)喜ぶのである。
- (13) なぜならば永遠に力ある者も安楽な者もないからである。従って、汝は、決して悪しきことに意識 (buddhi) を向けてはならない。(Cf.MBh.XII.251.26)
- (14) この(悪しきことを意識しない)者には悪人からの恐れもなく、盗人からの恐れも、王からの恐れもない。何事にも誰に対しても恐れをもたず清浄に過ごすべし。
- (15) 盗賊は、あたかも村に入った鹿のように、すべてを恐れる (śankate)。何度も為した悪事を他人の中に見るからである。
- (16) 満足し清浄な者は、あらゆる点で常に恐れなく(他人に)近づく。なぜならば、自分にとっていかなる悪しき行為も他人の中に見ないからである。
- (17) 「与えるべし」というこのダルマは生き物 (bhūta) の幸福に満足する者によって言われた。しかし富ある者はそれを貧しい者によって提唱されたと考える。
- (18) 彼らが運命によって貧困になったとき、彼らこそが喜ぶのである。なぜならば永遠に富ある者も、安楽な者もないからである。
- (19) 人 (puruṣa) は、自分に対して他人がするのを望まない行為を、自分にとっては不快な行為と知りながら、他人にしてはならない。
- (20) 他人(の妻)の情人 (upapati) になるような男は他人に (kam) 何を言う資格があろうか。しかし(彼でさえ)、他人が彼に同じことをするならば許さないであろう、というのが私の意見である。
- (21) 自ら生きることを願うものがどうして他人を害そうか。自分にとって望ましいものは他人にとっても(望ましい)と考えるべし。
- (22) 様々な財産を他の貧者 (akimcana) に分け与えるべし。この理由によって<sup>14</sup>創造主は利息を創造したのである<sup>15</sup>。
- (23) 神々が集うようなところでは(?)人はそのように(布施を与えるなどして)あるべし<sup>16</sup>。(富が)獲得された時に<sup>17</sup>ダルマに留まることも善きことである。
- (24) すべて愛情 (priya) によって実現されるものはダルマである<sup>18</sup>と賢者は言った。ユディシュティラ

<sup>10</sup>api pāpakṛto raudrāḥ api が文頭に来るのは、韻律のためか。

<sup>11</sup>P.,D.: mitho 'dhr̥ṣṭim K. mithyā dhr̥ṣṭim Cn. adhr̥ṣṭim samayatyāgam /

<sup>12</sup>P.,D.: iti dharmāḥ sanātanāḥ K. iti dharmavido viduḥ

<sup>13</sup>yadā niyatidaurbalyam Ca. niyatidaurbalyam bhāgyahānyupasthānam /

<sup>14</sup>etasmāt kāraṇāt Cs. etasmāt kāraṇāt saṃvibhāgakarāṇaḥ /

<sup>15</sup>kusīdam saṃpravartitam Cn. kusīdam vṛddhyartham dhanaprayogaḥ / sa dīnapoṣanārtham eva kāryo na dhanamātravṛddhyartham / Cp. kusīdam vṛttidhanam / kevalalobhena kusīdam na prāvartyam ity arthaḥ /

<sup>16</sup>yasmiṃs tu devāḥ samaye saṃtiṣṭheraṃs tathā bhavet / N. samaye sanmārgē saṃtiṣṭheran saṃmukhā bhaveyus tathā tanmārgacaraṇaṣīlo damadānadayā paro bhaved ity arthaḥ / Ca. (reading devasamaye) devoktadharmaphalakalpe /

<sup>17</sup>P. atha cel lābhasamaye D. atha vā lābhasamaye K. atha cel lobhasamaye

<sup>18</sup>P.,D.: priyābhyupagataṃ dharmam K. priyābhyupagataṃ puṇyam Cs. priyābhyupagataṃ parasya priyatvenābhyupagataṃ /

よ、このダルマとアダルマの特徴の教説を見るべし。

- (25) (ダルマは)世間の保護のために、かつて創造者によって規定された。それは微妙なダルマの目的に限定された、善き人々の最高の行為である。
- (26) このようにダルマの特徴は説明された、クル族のすぐれたものよ。従って、汝の意識 (buddhi) は不正直に向けられてはならない (cf.MBh.XII.251.13)。

[252 章] (=D.260 章、C.9257-76、K.266 章)

ユディシュティラは言った<sup>19</sup>

- (1) 汝によって、巧みにダルマの微妙な特徴は教示された (cf.Hara[1997] p.521)。私にひとつの考え (pratibhā) が浮かんだ。(汝の) 許可が得られるならば (anumānatas) 以下にそれを語るであろう。
- (2) 私の心の中で疑問であったものの大半は汝によって答えられた。王よ、論争のためではなく<sup>20</sup>、私はこの別の考えを語ることにしたい。
- (3) なぜなら (人は) これら (前章の善行など) の事柄について、主張したり、口にしたり (?)<sup>21</sup>、捨て去ったりする (?uttārayanti)。従ってダルマを完全に知ることはできないのである、バーラタよ。(Cf.Proudfoot[1987] p.98 (以下 252 章全訳); Hara[1997] p.522(以下 252 章抄訳))
- (4) 繁栄している人のダルマは困窮の人のダルマとは異なる。窮しかし迫している人々には (別のダルマがある)。ダルマを完全に知ることがどうしてできようか。
- (5) 善行 (sadācāra) はダルマと考えられる。そして (tu) 善人は行為によって特徴づけられる。善行が特徴づけられないものならば<sup>22</sup> どうして為すべきことと為すべきでないことを (知ることが) できようか。
- (6) 野卑な人 (prākṛta) は、ダルマの形によってアダルマを為すのが見られ<sup>23</sup>、高貴な人はアダルマの形によってダルマを為すのが (見られる)。
- (7) この (ダルマの) 基準は聖典を知る人々によって示された一方、ヴェーダの言葉はユガに従って減少する、と我々に伝えられている<sup>24</sup>。
- (8) クリタ・ユガにおけるダルマは、トレーター・ユガとドゥパーパラ・ユガ (のダルマとは) 異なる。カリユガにおけるダルマも別である。それはあたかも能力に応じて作られているかの如くである<sup>25</sup>。
- (9) 聖典の言葉は真実である、というのがこの世間の理解 (lokasaṃgraha) である。あらゆる方向に顔をむけたヴェーダは後に諸聖典より創造されたのである。
- (10) もしこれらすべて (の聖典) が認識の基準であるならば<sup>26</sup>、それ (ヴェーダ) は認識の基準ではない。(ヴェーダの中に) 認識の基準であり、基準ではないという対立があるならば<sup>27</sup>、(ヴェーダの) 聖典性はどこにあるのか。

<sup>19</sup>Proudfoot[1987]は、Poona版 252-256章の Jājali-Tuldhāra-saṃvāda、および 257章の Vicakhnugītāの詩節を考察し、その成立過程に関して、First Alignment, Second Alignment, Other archtypal text, Contaminationの四層の分類を提示している (pp.23-37)。これらの章には、前後の文脈のはっきりしない詩節があり、Proudfoot[1987]の主張は、示唆に富むものである。また同書 Chapter III Interpreting The Segmented Text において 252-257章を英訳するとともに分析を加えている (pp.97-152)。

<sup>20</sup>P. vighrahād iva D.,K.: nighrahād iva Cn. (nighrahād) kutarkāgrahēṇa / iva はここでは強調の意味か。

<sup>21</sup>P. imāni hi prāpayanti sṛjanti D.,K.: imāni hi prāpayanti sṛjanti Cs. imāni, pūrvādhyaḥ sadācārah smṛtir vedo daṇḍanūtir iti yāny uktāni / Ca. sṛjanti, vidhyarthena karmasu majjayanti /

<sup>22</sup>P. sadācāro hy alaṣaṇam D.,K.: sadācāro hy alaṣaṇaḥ Ca. anyonyāśrayakavalitvān na sadācāro 'pi lakṣaṇam /

<sup>23</sup>P. dr̥śyate dharmarūpeṇa adharmam prākṛtas caran / (sandhi 不規則) D. dr̥śyate hi dharmarūpeṇadharmam prākṛtas caran / (a 句の音節数不規則 cf.Hopkins[Great Epic] p.196.8) K. dr̥śyate dharmarūpeṇa hy adharmam prākṛtas caran / (hiatus breaker 'hi' inserted)

<sup>24</sup>P. hrasantūti ha naḥ śrutam D.,K.: hrasantūtiha naḥ śrutam Cp. hrasanti, āyurādivat / tena vedamūlatvaṃ śrūtinaṃ pratibhāmūlatvaṃ veti saṃśayagrastatvād apramāṇam eva /

<sup>25</sup>yathāśaktikṛtā iva Manu: nīnām yugahrāsānurūpataḥ (Manu 1.85)

<sup>26</sup>P. te cet sarve pramāṇam D.,K.: te cet sarvapramāṇam

<sup>27</sup>P. pramāṇe cāpramāṇe ca viruddhe D. pramāṇe 'py apramāṇena viruddhe K. pramāṇam ca pramāṇena viruddheyec

- (11) ダルマが衰退すると<sup>28</sup>、力ある者や心悪しき者 (*durātmabhiḥ*) によって各々のダルマの規則<sup>29</sup>は損なわれ、そして、その規則も消滅するのである。
- (12) 我々は、(ダルマを)このように知っている、あるいは知らない、我々は(ダルマを)このようにあるいは知ることもできる、あるいは知ることはできない。(その相違は)剃刀の刃よりも小さく、山よりも大きいのである。
- (13) 最初(ダルマは)蜃気楼の形をもつものとして見られる。しかし賢者たちによって吟味されると、その形は再び見られなくなる。
- (14) 象がやってきた時の溜め池のごとく<sup>30</sup>、あるいは田の溝のごとく<sup>31</sup>、パーラタ族よ、永遠のダルマは、記憶されていたとしても、消滅して見えなくなるのである。
- (15) ある人々は欲望のために、またある人々は(力の)衰退のために(?)<sup>32</sup>、そしてまた別の人々は他の原因のために、多くのよからぬ人々は、悪しき振舞いにふけるのである。
- (16) ダルマは存在する。しかしそれはすぐに賢者の中のみ消えてしまったのである<sup>33</sup>。他の人々は、彼らを狂人として嘲り笑ったと、言われている。
- (17) 多くの人々は、(利益のための)王のダルマに<sup>34</sup>近づき、依存する。あらゆるものの幸福のためのいかなる振舞も見られないのである。
- (18) ある人が利益を得る行為は、一方で他の人々を苦しめる。またさらにその行為は(両者に)等しい(*tulyarūpa*)ことも見られる。それは偶然による。
- (19) ある人が利益を得る行為は、他の人々を苦しめる。あらゆる振舞いは同一のものを指すものではないことを示していよう。
- (20) かつて長く保たれていた<sup>35</sup>行為が、賢者たちによってダルマと言われる。その行為によってかつては永遠の規則 (*saṃsthā*) が存在したのである。

[253章]<sup>36</sup>(=D.261章、9277-9328, K.268章)

ビーシュマは言った。

- (1) ここでも人はこの古譚を語る。商人トゥラーダラとジャージャリ仙とのダルマに関しての言葉を。
- (2) 林を彷徨して生活するジャージャリという名の一人の再生族が林の中にいた。偉大な熱力をもつ彼は、(ある時)海に (*sāgaroddeśa*) やって来て、苦行を行なった。
- (3) 自己を制御し、節制した食事をとり、ぼろ切れ・鹿皮を身にまとい、巻き髪をして、英知ある聖者 (*muni*) は、長い年月埃と泥にまみれていた。

<sup>28</sup>P. *dharmasya hriyamānasya* D.,K.: *dharmasya kriyamānasya*

<sup>29</sup>*saṃsthā* Ganguli: certain portion of certain courses; Deussen: dem Schema; 中村 [1998]:秩序; Proudfoot[1987],Hara[1998]: a rule

<sup>30</sup>P.,K.: *nipānānīva go'bhyāse* D. *nipānānīva gobhyo'pi* Ca. *yathā nipāneṣu, jalādhāreṣu prathamam dṛṣṭam jalam gonyāyena, gavāṃ niścayena ādye āgamane sati pītam san nopalabhyate /* Cs. *gavādinām upabhogārthaṃ kūpāder uddhṛtodakam yatra dhriyate tan nipānam /*

<sup>31</sup>*kṣetre kulyeva kṣetre kurye ca* Ca. *kulyā kṛtrīmā nadī prānālikā kṣetre praviṣṭā śuśyamānatvān na dṛśyate /*

<sup>32</sup>P. *kāmād anye kṣayād anye* D. *kāmād anye cchayā cānye* K. *kāmād anye bhayād anye* Proudfoot[1987]: (*kṣayaad anye*) out of weakness

<sup>33</sup>P. *vilīnas tv eva sādhuṣu* D. *pralāpas tv eva sādhuṣu* K. *vilomas teṣv asādhuṣu* Proudfoot[1987]: but quickly vanishes even in the worthy,

<sup>34</sup>*rājadharmam* Ca.,Cp.: *rājadharmam, arthasāstroktam, arthaikaprakaraṇatvāt* (Cp. *artheṣu tātpāryāt*) / Cs. *rājadharmam śreṣṭham dharmam, prākṛtajanānumatād dharmān nivṛttam /*

<sup>35</sup>*cirābhipannaḥ* Ca. *cirābhipannaḥ, avigītānādipravṛttaḥ /* Cs. *dīrghakālānuṣṭhitāḥ /*

<sup>36</sup>253章から 256章は、中村元『生活者の倫理-『マハーパーラタ』における主張』法華文化研究第3号 1977, pp.1-99に和訳されている。

- (4) ある時、偉大な熱力をもつ彼の賢者は、大地の主よ、水中に居ながら、心の速さで、もろもろの世界を見回しながら歩いた。
- (5) 彼の聖者は、ある時、海に限られ、林や森のある大地を観察した後、水の中で<sup>37</sup>考えた。
- (6) 『水中にいるままで私と天を行くことのできる<sup>38</sup>ような、私に匹敵する者は、動くもの動かぬものからなるこの世界には他に誰もいない』と、
- (7) 彼は、羅刹たちに姿を見られ<sup>39</sup>、水の中で語った<sup>40</sup>。するとピシャーチャたちは、彼に言った。「汝はそのように言う資格はない。
- (8) ベナレスで商業を天職とする、名声高いトゥラーダラでさえ汝が言ったように言う資格はないのだ、再生族のすぐれた者よ。(cf.MBh.XII.253.43)』
- (9) このように妖怪たちに (bhūtaiḥ) 言われた大きな熱力をもつジャージャリは、返答した。「私は、この英知あり名声あるトゥラーダラに会わねばならない」。
- (10) 聖仙がこのように言うと、羅刹たちは聖仙を海から持ち上げて<sup>41</sup>、言った。「この道に従って進むべし、再生族のすぐれた者よ。」
- (11) このように妖怪たちに言われ、ジャージャリ仙は、その時落胆した状態で、道を進んだ。彼は、ベナレスでトゥラーダラに近づき、言葉を発した。

ユディシュティラは言った。

- (12) かつてジャージャリ仙によって為された、それによって最高の成就が達成された善行とは何か、父よ<sup>42</sup>、それを我々に語るべし。

ビーシュマは言った。

- (13) 彼は、恐ろしい苦行に懸命に (atīva) 集中していたということだ。、大きな熱力をもつ彼は、朝夕川で沐浴するのに喜んだ<sup>43</sup>。
- (14) 祭火を守り、正しくヴェーダ学習に専心し、林住の規定を知る再生族であるジャージャリ仙は、幸運によって輝いていた。
- (15) 彼は、真実の苦行に住しつつ<sup>44</sup>、(自分の行為を)ダルマと考えることはなかった<sup>45</sup>。彼は、雨期には屋外で眠り、冬には水中に住した。
- (16) 彼は、夏には風と熱に耐えてたが、それでも (永遠の)ダルマを得ることはなかった (?)<sup>46</sup>。彼は、種々の苦しい寝床を用い、そしてまた大地に転がったのである<sup>47</sup>。

<sup>37</sup>P. jaramadhye D. jalavāse Cn. jalavāse mahīm viprekṣya, tapobalād dūradarśanādisiddhiṃ prāpya

<sup>38</sup>apsu vaihāyasaṃ gacched Ca. vaihāyasaṃ nakṣtrādi / Cn. ākāśagataṃ grahanakṣtrādi / gacched avagacchet // Cs. vaihāyasaṃ, ākāśavadbhāvasāhityam // Cv. apsu vaihāyasaṃ, pavanodvandhanena jaloparisamcāram / Duessen: der zugleich mit mir im Wasser weilend den Luftraum durchmessen könnte.

<sup>39</sup>P.,K.: sa dr̥śyamāno D. adr̥śyamāno

<sup>40</sup>P. avadat tataḥ D. avadaṃs tathā K. ca bhārata K. は、この後に次の一行を挿入している。

āṣphotayāt tadākāṣe dharmāḥ prāpto mayeti vai /

<sup>41</sup>P.,D.: uddhṛtya, K. utthāya

<sup>42</sup>P. sukṛtaṃ karma tāta D.,K.: duṣkaraṃ tāta karma

<sup>43</sup>P.,D.: nadyupasparsānarataḥ K. nadyupasparsānaparāḥ N. upasparsānarataḥ snānācamanarataḥ

<sup>44</sup>P. satye tapasi tiṣṭhan D.,K.: vane tapasy atīṣṭhat

<sup>45</sup>P.,D.: na ca dharmam avaiṣṣata K. na cādharmam avaiṣṣata Cn. na ca dharmam avaiṣṣata, dharmavān asmīti mānaṃ na prāpyeti arthaḥ / Cs. kāmakrodhādīyukte manasi na dharmo babhūvety arthaḥ /

<sup>46</sup>P.,D.: na ca dharmam avindata K. na cādharmam avindata Ca. dharmānācarann api aśāsvataṃ dharmāṃ viveda [na śāsvatam] / Cs. (reading [a]dharmam for dharmam) vākkāyābhyāṃ na kiṃcit pāpam kṛtavān /

<sup>47</sup>P.,K.: prāvartanam D. parivartate

- (17) そしてある時には、かの聖者は雨期に外に居て、空からの水を絶えず頭で受けた。
- (18) その時彼の<sup>48</sup>束ねられた巻き髪は濡れ、威光ある者よ。常に森を歩くために汚れが付着したので、彼は汚れたのである。
- (19) そしてある時彼は、食事をとらず、風を食べ、大きな熱力を持ち、心を集中して杭のごとくに立ち、決して動かなかった。
- (20) 杭のごとくとなって動くことなき彼の頭に、バーラタ族よ、一つがいの雀が<sup>49</sup>、巣を作ったということである、王よ。
- (21) かの慈悲深い聖仙は、その二羽の夫婦の鳥がその巻き髪の中に木の葉や糸くずで巣を作っている間<sup>50</sup>、二羽を意に介さなかった。
- (22) 大きな熱力をもつ彼が、杭のごとくとなって動かない間<sup>51</sup>、その二羽はそれゆえ安全と思い<sup>52</sup>、そこで安楽に過ごした。
- (23) その後雨期が過ぎ、秋になった時、二羽は、安心のゆえ、造物主の決まりに従って<sup>53</sup>愛欲にふけた。
- (24) 二羽の鳥は、その(聖仙の)頭に卵を産み落したのである<sup>54</sup>、王よ。威光を持ち、誓約を守るかの聖仙は、それに気がついた。
- (25) 気がついた後も、大きな威光をもつジャージャリ仙は動かなかった。常にダルマに対して確固とした心をもつ彼は、アダルマを喜ばなかった(からである)。
- (26) その後、毎日その二羽は(聖仙の)頭にやって来て、安心し、喜びに満ちてそこに住んだのである、威力ある者よ。
- (27) すると大きくなった卵から小鳥が誕生し<sup>55</sup>、そしてそこで成長した。しかしジャージャリ仙は微動だにしなかった<sup>56</sup>。
- (28) 誓約を遵守し<sup>57</sup>、ダルマを本性とする彼は、雀の卵を守り、少しも動かさず心を集中してそのまま立っていた。
- (29) それから時が熟し<sup>58</sup>、ある時(atha)小鳥たちに羽が生えた。かの聖者はこの小鳥たちに<sup>59</sup>羽の生えたことに気がついた。
- (30) それからある時<sup>60</sup>、その羽の生えた鳥たちを見つ、誓約を守り、思慮ある者の中ですぐれたかの者に、最高の喜びが生じた。

<sup>48</sup>P.,D.: atha tasya K. āplutasya

<sup>49</sup>kuliṅgaśakunau Ca. kaliṅgaśakunau dhūmyārapakṣiṅau / kuliṅgaśakunāv iti pāṭhe kapotapakṣiṅau / (pigeon, a bird of bad omen) Cs. kuliṅgaś catakah (sparrow) / kuliṅga: Bötlingk: ein best. Vogel, der gabelschwänzige Würger; Moniel: having bad marks, fork-tailed shrike(もず), mouse sparrow; Apte: 1 bird in general 3 sparrow この箇所を例としている。

<sup>50</sup>P. kurvāṇam nīḍakam D.,K.: kurvāṇau nīḍakam

<sup>51</sup>P. yadā sa na calaty D.,K.: yadā na sa calaty

<sup>52</sup>P. pariviśvastau D.,K.: sukhaviśvastau

<sup>53</sup>prājāpatyena vidhinā N. prājāpatyena garbhādhānavidhinā

<sup>54</sup>P.,D.: tatrāpātayatām K. tatrotādayatām

<sup>55</sup>P. prajāyanta D.,K.: prajāyanta P. は augmentless imperfect. (cf. Gonda 『サンスクリット叙事詩・プラーナ読本』 p.248,(17); Sindhu S. Dange, Puranic Etymologies and Flexible Forms, Aligarh, 1989. p.124(5),(6): (5) bravīt instead of abravīt Matsya P. 49.3b, 144.26b, (6) bhāsat instead of abhāsat Matsya P. 155.31b) 韻律的には、augment が付加されても可能。

<sup>56</sup>na cākampata jājaliḥ は定型表現、以下 32,33,35 詩節に用いられている。

<sup>57</sup>P. yatavrataḥ D.,K.: dhṛtavrataḥ

<sup>58</sup>P.,D.: kālasamaye K. kāle rājendra N. kālasamaye kālamaryādayām satyām

<sup>59</sup>P. śakuntakān D.,K.: kuliṅgakān

<sup>60</sup>tatah kadācit tāms tatra Ca. pakṣair vipaṇīcatas tāms tu Ca. pakṣair vipaṇīcataḥ pakṣasamghodgamād uḍḍāyamānān // Cp. pakṣair udgatair atas tato gatān ity arthaḥ

- (31) 同様に、二羽の鳥は、成長した彼らを見て喜びを得<sup>61</sup>、恐れるものなく子供たちと共にそこに住んだ。
- (32) 彼は、羽が生えた鳥たちが<sup>62</sup>、飛び上がって、毎晩再び帰って来るのを見た。しかし、賢者ジャージャリは微動だにできなかった。
- (33) ある時はまた、彼らは、両親に捨てられたのに、帰って来ては、またすぐに飛び去った。しかし、賢者ジャージャリは微動だにできなかった。
- (34) そして、小鳥たちは、昼間遊びに飛び去り、再び、王よ、夕方には、また同じところへ夜を過ごすために戻って来たのである。
- (35) 鳥たちは、あるときは、五日間飛び去った後、六日目に一緒に戻って来た。しかし、賢者ジャージャリは微動だにできなかった。
- (36) そしてその鳥たちはすべて、生命力が強くなり<sup>63</sup>次第に何日も戻って来なくなった。
- (37) ある時、鳥たちは一月の期間飛び去って、それから戻って来なかったのが<sup>64</sup>、王よ、かのジャージャリ仙は前進した。
- (38) それから、彼らが消え去ると、ジャージャリ仙は、傲慢にも「私は成就した」と考えた。すると彼に自惚れが (māna) 入り込んだのである。
- (39) このように鳥たちが去ったのを見て、誓約を守った彼は、得意になり (sambhāvitātma)、得意になって<sup>65</sup>、その時大変に満足した<sup>66</sup>。
- (40) 大きな熱力をもつ彼は、川で沐浴し、祭火をつけて、登ってきた太陽に (礼拝のために) 近づいた<sup>67</sup>。
- (41) 低誦者の中ですぐれた者であるジャージャリ仙は、頭の上で雀たちで成長させた後、次のように空中に大声を発した<sup>68</sup>。「私はダルマを達成した」と。
- (42) すると空中に声が出た。それをかのジャージャリ仙は聞いた。『ジャージャリよ、ダルマに関しては、汝はトゥラーダーラに及ばない。
- (43) ベナレスに住んでいる偉大な英知をもつトゥラーダーラ、彼でさえも汝が言ったように言う資格はないのだ、再生族よ。』
- (44) かの聖者は、トゥラーダーラに会いたくなって、いても立っても居られず、どこでも夕暮れになった所を宿として (yatrasāyaṃṛha)、大地を進んだのである、王よ。
- (45) 長い時間かかって彼はベナレスの町に行き着いた。そしてトゥラーダーラが商品売っているのを見た。
- (46) 商品で生計を立てるかの者も<sup>69</sup>、その賢者が近づいて来るのを見て、大変喜び、立ち上がって、歓迎の挨拶をした。

<sup>61</sup>P.,D.: cāpnuvatām mudam K. caivāptavān mudam āpnuvatām: irregular? 3rd dual imperfect (P) āpnutām, (A) āpnvātām

<sup>62</sup>dvijān N. dvijān śakutān /

<sup>63</sup>P.,D.: jātaprāṇāḥ sma K. jātapakṣas ca

<sup>64</sup>naivāgacchanṣ tato 現在分詞āgacchan は、複数主格 vihagamāḥを修飾しているので、āgachantaḥとなるべき。

<sup>65</sup>sambhāvya Cn. sambhāvya vardhayitvā / (この注はボンベイ版第 41 詩節の sambhāvya に対する注である。) Cs. jīvanty ete iti drṣtvā Ganguli: thought highly of himself

<sup>66</sup>P.,K.: prītas tadābhavat D. prītamanā 'bhavat

<sup>67</sup>P. abyagacchan D. upātiṣṭhan K. abhyāgacchan

<sup>68</sup>āspḥotayat N. āspḥotayad bāhuśabdām akarot cf. 中村 [1998] p.599 fn.11

<sup>69</sup>bhāṇḍajīvanaḥ Ca. bhāṇḍaiḥ nānāvidhaiḥ panyaiḥ jīvanaḥ jīvikā yasya / bhāṇḍasālika ity arthaḥ / Cn. bhāṇḍam mūladhanaṃ, tena jīvanaṃ yasya / 'syād bhāṇḍm aśvābharāṇe 'matre mūlavanigdhane' ity viśvaḥ / Cs. bhāṇḍāni candanakunkumādīni, teṣāṃ vikrayeṇa jīvanaṃ yasya /

トゥラーダラは言った。

- (47) バラモンよ、私はあなたが来ることを既に知っていた。(このことに)疑いはない。私が語る言葉を聞くべし、再生族のすぐれた者よ。
- (48) 海辺に<sup>70</sup>住んで、汝は偉大な苦行を行なった。しかし (ca)、ダルマの意識を<sup>71</sup>汝はかつて全くもたなかった。
- (49) その後、苦行によって成就者となった汝の頭に、賢者よ、間もなく小鳥たちが誕生した。そして彼らは汝によって生まれた。
- (50) 彼らは羽が生えるとあちこちに遊びに飛び去った。すると汝は、雀の誕生をダルマと考えたその時<sup>72</sup>、汝は私についての言葉を空中に聞いたのである、再生族よ。
- (51) その後、いても立っても居られず御身はここにやって来た。私は汝にとって善きことは何でもするでしょう。それを言って下さい、再生族のすぐれた者よ。

[254 章] (D.262 章、9339-9395, K.268 章)

ビーシュマは言った<sup>73</sup>。

- (1) 思慮をもち低誦者の中ですぐれたるかのジャージャリ仙は、このように思慮深いトゥラーダラによって言われ、(次のような)言葉を語った。
- (2) 『あらゆる飲物、あらゆる香、木材、薬草、そしてその根と果実を売りながら<sup>74</sup>、商人よ、
- (3) 汝は確固とした認識に至った。どうしてこの認識は汝に至ったのか<sup>75</sup>。このことをすべて残りなく私に語るべし、偉大な英知をもつ者よ。』
- (4) このように栄光あるバラモン (ジャージャリ仙) に尋ねられ、ダルマの意味の真実を知り、知識に満足している商人トゥラーダラは、困難な苦行を行なったジャージャリ仙に、その時もろもろの微妙なダルマを語った<sup>76</sup>。
- (5) ジャージャリ仙よ、私は、秘密にして永遠なる、あらゆる生き物の幸福のための慈悲のダルマ、人々はそれを昔からのもの (purāṇam) として知っているが、そのダルマを知ったのである。
- (6) 生き物にとって危害のない振舞い、あるいは危害の小さい振舞い、それが最高のダルマである。それに従って私は生活しているのである、ジャージャリ仙よ。(Cf.MBh.III.281.34, XII.156.21; Manu 4.2<sup>77</sup>)
- (7) 切り取られた木の幹と葉を用いて、私はこの家を作った。そして、赤い染料、パドマカの木、ツンガの木<sup>78</sup>、強い香料、弱い香料、
- (8) さまざまな飲物、バラモンの賢者よ、酒以外のたくさんの飲物を (madyavarjān)、他人の手から買った後、私はごまかすことなく売っている。

<sup>70</sup> sāgarānūpaṃ Cn. sāgarānūpaṃ sāgarasamīpasthaṃ sajalam pradeśam anūpa – anu+apas dvīpa dvi+āpas, Pānini 5.4.74

<sup>71</sup> dharmasya samjñāṃ N. samjñāṃ dharmavān aham iti jñānam / 「ダルマは完成したという意識をもたなかった」という意味か。

<sup>72</sup> manyamānas tato dharmam caṭakaprabhavam Cs. caṭakaprabhavam, caṭakotpatihetubhūtanīśalāvasthānaprabhavam /

<sup>73</sup> この章は、Jājali と Tulādhara の対話を Bhīṣma が伝えるという構成になっているが、P. は冒頭に Bhīṣma uvāca というのみで、Jājali, Tulādhara の言葉を伝える詩節を明示しない。それに対し、D. は発言者を明示し、K. は Tulādhara のことばのみ明示しない。

<sup>74</sup> P. vikrīṇāṇaḥ D., K.: vikrīṇataḥ

<sup>75</sup> P., D.: adhyagā naiṣṭhikīm buddhiṃ kutas tvām idam āgatam / K. agryā sā naiṣṭhikī buddhiḥ kutas tvām iyam āgatā /

<sup>76</sup> dharmasūksmāni の語については、原 [1997] で詳細に論じられている。なおこの詩節は3種のテキストのうち P. のみ三行詩であり、P. の以下のような ef 句は D. と K. にはない。 jājim kaṣṭhatapasam jñānatṛptas tadā nṛpa /

<sup>77</sup> Manu 4.2 の ab 句は完全に一致するが、cd 句は大きく異なる。 yā vṛttis tām samāsthāya vipro jīved anāpadi / (Manu 4.2cd)

<sup>78</sup> alaktam padmakam tuṅgam quad Cp. alaktam lākṣā, padmakam padmakāṣṭham, tuṅgam rasaviśeṣam / Cs. alaktam ulmukkam padmakam gajamadam, tuṅgam candanabhedam



- (9) 常にすべての人の友であり、すべての人の幸福に、行為によって、心によって、言葉によって喜ぶ者が、ダルマを知る者である、ジャージャリ仙よ<sup>79</sup>。
- (10) 私は、世間の多様さをあたかも空の多様さのごとくに見るので<sup>80</sup>、他人の行為を称賛も非難もしないのである、バラモンの賢者よ。
- (11) 私は、追従もせず対立もせず、憎みもせず愛着ももたない。私はすべての生き物に対し平等である。ジャージャリ仙よ、(これを)私の誓いと見るべし。
- (12) 望ましいことと望ましくないことを離れ、歓喜と執着を追い払った<sup>81</sup>私の秤はあらゆる生き物に対して平等である<sup>82</sup>、ジャージャリ仙よ。
- (13) このように私をこの世の一切を等しく見る者と知るべし、ジャージャリ仙よ。私を、土くれ、石、金を等しく見る者と汝は知るべし、知恵ある者の中で優れた者よ。
- (14) たとえば、盲人、聾者、狂人たちは、常に最高の慰めをもつ者である<sup>83</sup>。神々によって感官を閉ざされた者たちは、目は見える (paśyato)(が欲望を離れた)私と等しいのである。
- (15) 老人、病人、貧しい人々が、ものに対して望みをもたないように、私にも財産や愛欲の享受に対する望みはないのである。
- (16) ある者が何も恐れず、その者を恐れる者もなく<sup>84</sup>、何も望まず何も憎まぬ時、彼は再生族として成就するのである<sup>85</sup>。(Cf. MBh.XII Śāntiparvan App.I.(No.4,lines 27-30)
- (17) 行為によって、心によって、言葉によって、あらゆる生き物に対して悪意をもたぬ時、その時(彼は、)ブラフマンに至るのである。(Cf. Nārada Parivrājaka Up. 3.22, Bhāgavata Purāṇa 9.19.15)
- (18) (これ以外には)過去にも未来にも現在にも、いかなるダルマも存在しない。あらゆる生き物にとつて恐れとならぬ者が、無畏の境地に達するのである。
- (19) あたかも死の口を恐れるかのごとく、世間の人すべてが、無慈悲な言葉、厳しい罰の故に恐れる者、彼は大きな恐怖を得る。(Cf.MBh.III.29.21cd)
- (20) 息子と孫をもち、殺生を行なわない、正しく振舞う偉大な長老たちの振舞いに我々は従うのである。
- (21) (しかし)「善行」(とされるもの)によって<sup>86</sup>混乱したために、永遠の<sup>87</sup>ダルマは滅する。そのため、ヴェーダを知る者にせよ<sup>88</sup>、熱力をもつ苦行者にせよ、あるいは力ある者にせよ、(ダルマに関して)混乱するのである。

<sup>79</sup>第10詩節から第13詩節は、P.D.K.の順序は一致しない。P.10=D.11=K.11, P.11=D.10abcd=K.10abcd, P.12ab=K.12abはD.にない。P.12cd=D.10ef=K.10ef, P.13=D.12=K.13 というように対応している。

<sup>80</sup>ākāśyeva vipraṣe paśyaṃl lokasya citratām /

「空の多様さ (ākāśasya citratā)」を Nilakaṇṭha は「空の雲の多様さと」と解し、Arjunamiśra は「曇気楼の現われなど」と解している。Tulādhara の意図は、世間の出来事は実体がないものと考え、という点にあると思われるので、Arjunamiśra の解釈の方が適当であろう。N. ākāśya abhramapaṭālasya citratām vividhākaratvam / (Deussen: wie [auf die Wolkenspiele] im Himmelsraume) Ca. citratā gandharvanagarālokanādaḥ / Cp. lokasya svaprakāśasyātmanah /

<sup>81</sup>P. iṣṭāniṣṭavimuktasya prītirāgabahiṣṭraḥ K. iṣṭāniṣṭaviyuktasya priyadveṣau bahiṣṭrau D. にはこの句はない。

<sup>82</sup>tulā me sarvabhūteṣu samā tiṣṭhati Hopkins は、「等しさ」を表す表現の例として言及している。(Hopkins[1902]p.127)

<sup>83</sup>ucchvāsaparamāḥ Cs. ucchvāsaparamāḥ prānadhāraṇamātraparāḥ / Deussen: den Tod immerfort herbeisehnen Ganguli: As the blind, the deaf, and they that are destitute of reason, are consoled for the loss of their senses, after the same manner am I consoled, 中村[1998]盲人、聾の人、狂人であることは、常に最上の慰めです。Cs. によれば、「生きるのに精一杯の」という意味になり、Deussen も同じ意味で解しているが、ここでは、逆説的に、そのようなあり方そのものが肯定されている、という趣旨である。

<sup>84</sup>yadā cāyaṃ na bibheti yadā cāsmān na bibhyati / V— — —, V V— V, V— — —, V— V V (b 句の韻律不規則) Cf.Gonda, 前掲書 p.269 (minor ionic); Hopkins[Great Epic] p.230

<sup>85</sup>P.,K.: tadā sidhyati vai dvijaḥ D. brahma sampadyate tadā

<sup>86</sup>sadācāreṇa 「善行」は本来、ダルマに基づくものであるから、「善行」によってダルマが滅するのは、意味をなさない。そのため「善行」の意味に関して、「偽りの善行」「近年の善行」といった異なった解釈が示されている。Cp. sadācāreṇa ity upahāse / asatām ācāreṇety arthaḥ / Cs. sadācāreṇa, adyatanasadācāreṇa / 「善行の概念の混乱によってダルマは滅する」という意味か。Hara[1997]: The eternal *dharma* perishes everytime when confused with good customary behaviour (*sadācāra*). (p.522)

<sup>87</sup>śāsvataḥ Cp. śāsvataḥ, apāramārthikāḥ, andhapraṇparayānuṣṭhiyamānaḥ /

<sup>88</sup>vaidyas Ca.,Cn.,Cp.: vaidyaḥ, vidyāvān /

- (22) 英知ある者は、ジャージャリ仙よ、よき振舞いによってすぐにダルマを獲得するであろう。同様に、もろもろの善き人々(の行為?)によって (sādhubhiḥ) 自制し、敵意なき心によって行為する者も(すぐにダルマを獲得するであろう)。
- (23) この世では、たまたま一つの木片が川の中を流れて行くと、たまたま別の木片と出会うことがある。(Cf. MBh.XII.28.36, 168.15; Rāmāyaṇa 2.105.26; Hitopadeśa 4.73)
- (24) すると、そこでは、その後、別の木片が、そしてある時には思いがけず<sup>89</sup>、木の葉、木片、ゴミが結びつく。これと同様に、この善き振舞いも様々なところ(原因)から生じたのである<sup>90</sup>。
- (25) 彼はいかなる生き物をも全く恐れないのであるから、常にあらゆる生き物からの無畏に達するのである、尊者よ。(Cf.MBh.XII.254.30)
- (26) 賢者よ、世間の人すべては、狼を恐れるかのごとく彼を恐れる。それはあたかも水中のあらゆる生き物が、岸に近づくと、(人々の)叫び声を(恐れる)かのごとくである<sup>91</sup>。
- (27) 仲間をもち、物をもち、裕福にして、他と異なり (anyo) 敵なき人<sup>92</sup>、彼らについて、名誉のために意を用いず<sup>93</sup>、賢明にして汚れなき知識をもつ<sup>94</sup> 詩人たちは、もろもろの聖典において(嘲笑的に)語っている<sup>95</sup>。
- (28) 苦行によって、祭式と布施によって、そしてまた英知に基づいた<sup>96</sup>言葉によって、この世で獲得する果報は何でも、無畏を布施する者は獲得する。
- (29) 世界においてあらゆる生き物のために、無畏という贈物を与える者は、あらゆる祭式を行う者として、無畏という贈物を獲得する。生き物の不殺生よりもすぐれたダルマは何もないのである。
- (30) 彼はいかなる生き物も全く恐れないのであるから、あらゆる生き物からの無畏に達するのである、偉大な尊者よ。(=MBh.XII.254.25)<sup>97</sup>
- (31) 世間人は、家の中にいる蛇のごとく彼を恐れるので (cf.MBh.XII.123.16cd)、彼はこの世でもあの世でも、ダルマを得ることはない。
- (32) あらゆる生き物の本性となり、生き物を正しく<sup>98</sup>観察する足跡なき者の道には、足跡を求める者は、神々でさえも、迷うであろう<sup>99</sup>。(Cf.MBh.XII.231.23, 261.21; Bombay. XII.113.7; Brahma Sūtra Śaṅkara Bhāṣya 4.2.14; Hopkins[Great Epic] p.197)

<sup>89</sup>P. kadācinn asamīksayā K. kadācin na samīksayā Cs. kadācit, kṛtayugātyaye /

<sup>90</sup>P. は三行詩である。D. には Pef に相当する句(「このように、」以下)は D.26cd, K.27ab にある。

<sup>91</sup>vṛkāḍ iva / krośatas tīram āsādyā sarve jālecarāḥ / N. vṛkaḥ hīmsrapaśuḥ dr̥ṣtānte vadavāgniḥ / このように Nīlakaṇṭha は、魚などが恐れる叫び声を、海底にあるとされる「ヴァダバの火」vadavāgni と注釈している。Ganguli は、この解釈に依って、「水中の生き物がうなり声を発するヴァダバの火の恐れから岸に跳び上がるのを余儀なくされた時のように、(あらゆる生き物は恐れに満たされる)と訳している。(vol.IX, p.235.14-15) 中村 [1998] も同様に解している。このように解すると、gerund の āsādyā の機能が理解しにくい。いずれにせよ、この詩節で述べられている人物は「無畏」を実現しているとは考えられず、この詩節は前後との脈絡がない。

<sup>92</sup>P. 'nyo 'paras tathā D.,K.: 'tha paras tathā N. paraḥ paralokahetuś ca /

<sup>93</sup>kīrtyartham alpahr̥llekḥāḥ Cp. kīrtyarthaṃ, na tu parārtham / Ca.,Cp.: alpahr̥llekḥāḥ kṣīṇaprāyāntaḥkaraṇa(Cp. -prāyamaṇo)malāḥ, tattvadarśinaḥ / Cn. alpam̐ bhāyasukhaṃ hr̥di lekḥena pratiṣṭhitaṃ yeṣāṃ te, bahirmukhāḥ / Cs. hr̥dayagatālekḥāḥ tatra paṭavaḥ, kāmitārthaprāptisamarthāḥ /

<sup>94</sup>kṛtsnanirṇayāḥ Ca. kṛtsnanirṇayāḥ nirmalajñānāḥ / Cn. kṛtsnaṃ brahma, tanmūlakāḥ nirṇayo yeṣāṃ / Cp. kṛtsnanirṇayāḥ bhūmaprāptiniścayāḥ / Cs. kṛtsnanirṇayāḥ kālatrayābhijñāḥ /

<sup>95</sup>pravadanty uta Cp. tān eva andhapraṃparayā pravadanti, prakṛṣṭān vadanti

<sup>96</sup>prajñāsritaiḥ Cp. prajñāsritaiḥ pratīkopāsanāsritaiḥ /

<sup>97</sup>この2つの詩節の相違は、代名詞 sa の位置、呼格 mahāmune(30) に対して sadā mune(25) となっている点の2箇所である。第30詩節において、前詩節との脈絡がはっきりしないまま、ほとんど同じ詩節が繰り返されているのは何故か、疑問の余地がある。

<sup>98</sup>P. samyag bhūtāni D.,K.: sarvabhūtāni MBh.XII.231.23, 261.21 では、P. も sarvabhūtāni と読んでいて、Cp. samyak, brahmābhīpannatayā / Cs. samyak, sāmyena /

<sup>99</sup>devāpi mārgē muhyanti apadasya padaiṣiṇaḥ / Cp. apadasya, anāśrayasya, ātmapratiṣṭhasya / Cs. apadasya, avidyamānāmarūpasya paramātmanāḥ, padaiṣiṇaḥ sthānam icchantāḥ / Cv. apadasya sthānarahitasya viraktasya, padaiṣiṇaḥ mārgam icchantāḥ / なお cd 句では、sandhi が devāpi (devā api とするべき) と muhyanti apadasya (muhyanti apadasya とするべき) の間で不規則になっている。またこの慣用表現的詩節は、前後とのつながりがない。

- (33) 生き物に恐れをもたない人の (bhūtābhayasya) 布施は、あらゆる布施の中で最高である、と言われている (cf. MBh. XII. 237. 26)。私は、汝にこの真実を語るであろう。ジャージャリ仙よ、汝はこれを信じるべし。
- (34) 同じ人が、裕福になった後、再び貧しくなる。人々は行為の失敗を見ると、常に (その失敗を) 隠そうとする。
- (35) この世には、それが (どんなに) 小さなものであっても<sup>100</sup>、原因とならない<sup>101</sup>ダルマはないのである、ジャージャリ仙よ。この世でのダルマは、生き物の未来のためにこそ<sup>102</sup>、宣言されているのである。
- (36) 彼 (のダルマ) は、対立するものが多くあり<sup>103</sup>、微細であるために、認識することができない。それは時に (antarā) ダルマではない (anya) もろもろの行為を目にした後、気づかれる<sup>104</sup>。
- (37) (牛の) 陰囊を切り裂き、鼻に穴を開け、大きな荷物を乗せ<sup>105</sup>、繋ぎ、調教する者たち、
- (38) 生き物を殺して食べる者たちを、汝は何故非難しないのか。人は人を召使という財産として<sup>106</sup>支配する (bhujate)。
- (39) 体刑・束縛・妨害を通して日夜働かせている<sup>107</sup>。汝もまた自ら体刑と鞭打ち (?tādāna) における苦しみを知っていよう<sup>108</sup>。
- (40) 五官をもつ生き物には、あらゆる神格が住んでいる。(その神格とは、太陽、月、風、ブラフマー、氣息、クラトゥ、ヤマである<sup>109</sup>。
- (41) これら生きているものを<sup>110</sup>売った後、死んだ時には、いかなる配慮をしているのか<sup>111</sup>。しかし、油においてはいかなる (配慮が必要であろう)。グリタにおいては、蜜においては、水においては、薬草においては (いかなる配慮が必要であろう)、バラモンよ。
- (42) ブヨや蚊のいない場所で心地よく育った家畜を、人々は、彼らは母親にとって愛しいものであると知りつつも<sup>112</sup>、何度もやって来て、ブヨや草が (?) 多く<sup>113</sup>埃だらけの場所に連れて行く。

<sup>100</sup> P. sūkṣmo 'pi D., K.: sūkṣmo hi Deussen: aber sie ist scher ū verstehen

<sup>101</sup> akāraṇo Cs. akāraṇaḥ phalarahitaḥ /

<sup>102</sup> bhūtābhavyārtham eva Ca. bhūtaṃ kāraṇam, prāksiddhatvāt / bhavyam utpādyam kāryam / tadartham, yajñāder dharma-kāraṇatvapradarśanārtham eva / Cn. bhūtārtham brahma, bhavyam svargādi / ubhayārtham eva / Cp. bhūtārtham brahmajñānārtham, bhavyārtham svargādyartham / Cs. bhūtānām bhavyam śobhanam, tadartham Deussen: um des Gewordenen und Künftigen [Irdischen und Himmelschen] willen この合成語については、bhūta と bhavya の関係を dvandva ととるか、tatpuruṣa ととるか、2つの可能性がある。

<sup>103</sup> bahuniḥnavāḥ Ca. bahuniḥnavāḥ, śabdavaṣamyād arthavaṣamyāc ca durjñeyārthaḥ / Cs. bahubhir dharmāntarārthavādaiḥ tiraskṛtaḥ /

<sup>104</sup> upalabhāntarā cānyān ācārān avabudhyate Cp. ācārān avabudhyate, mūlakāraṇānusandhānam na budhyate /

<sup>105</sup> vahanti Cp. vahanti vāhayanti / N. vahanti vāhayanti /

<sup>106</sup> P., K.: dāsabhogena D. dāsabhāvena

<sup>107</sup> kārayanti Cp. kārayanti, karmānīti śeṣaḥ

<sup>108</sup> P. ātmanā cāpi jānāsi yad dukkhaṃ vadhatādane D., K.: ātmanā cāpi jānāti yad dukkhaṃ vadhabandhane

<sup>109</sup> ādityaś candramā vāyur brahmā prāṇaḥ kratur yamaḥ Cp. ādityaś cakṣuṣi, candramā manasi, vāyus tvaci, brahmā ātmā, vāyuh prāṇaḥ, kratuh prāṇahutiśādhyo yajñāḥ, yamaḥ krodho manodharmaḥ / Cs. ādityo dakṣiṇabhāge carati, candramā vāmbhāge / tathā yogāyājñavalkyaḥ — idāyāṃ carate candraḥ piṅglāyāṃ tu bhāskaraḥ, iti / vāyur vyānādiḥ, brahmā ātmā, prāṇaḥ prāṇavāyuh / kratur apānavāyuh, apānaḥ kratur iti brāhmaṇam yamaḥ paramātmā /

<sup>110</sup> jīvāni Ca. jīvāni, jīvasamūhān / jaivānīti pāṭho yuktāḥ / samūhārthe 'ṇ /

<sup>111</sup> D., K. はこの ab 句の後に次の詩節を挿入している。

ajo 'gnir varuṇo meṣaḥ sūryo 'śvaḥ pṛthivī virāṭ /  
dhenur vatsaś ca somo vai vikrīyaitan na sidhyati /

<sup>112</sup> jānan(n) narāḥ (Nominative Plural, m.) を修飾するので、文法的には jānantaḥ となるべき。

<sup>113</sup> P. bahudamśakuśān D., K.: bahudamśakulān P. の bahudamśa-kuśa では意味がとりにくい。

- (43) 荷物に押し潰された<sup>114</sup>他の牛たちは、所かまわず(?)<sup>115</sup>座り込む。私は、バラモン殺し<sup>116</sup>でさえ、この行為よりひどいことはないと思う。
- (44) (農耕は善、と人々は考える<sup>117</sup>。しかし(ca)その行為は、大変恐ろしいものである<sup>118</sup>。鉄を先につけた木片(鋏)は<sup>119</sup>、大地と大地に住むものを<sup>120</sup>殺すからである。(Cf.Manu 10.84)これと同様に(荷車に)結びつけられた雄牛たちを見るべし、ジャージャリ仙よ。(Cf. Manu 10.84)
- (45) 「殺されざる者」というのが牛の名前である(cf.RV.1.37.5, 8.58.8, 9.93.3 et passim; AV. 6.70, 10.9)。誰がそれを殺すことができよう。(もし殺すならば)大きな不祥を為したことになる。プリシャドラが(誤って)牛を殺して(不祥を為したの)と同様に<sup>121</sup>。
- (46) かつて聖仙と苦行者は、ナフシャに次のように語った。「汝は、牛と母牛を、そして造物主たる<sup>122</sup>雄牛をも殺した。ナフシャよ、汝は為すべきではないことを行なった。我々は、汝のしたことの恐怖を受け取ることになる。」
- (47) 大きな幸運をもつ聖仙たちは、(ナフシャの罪を分割して)百一の病気をあらゆる生き物に降せた(cf.Hopkins[Epic Mythology]p.131)。彼らは、ジャージャリ仙よ、人々のいるところで(?)<sup>123</sup>、バラモン殺しのナフシャに言った。「我々は、汝に供物を捧げることはないであろう」と。
- (48) このように言って、偉大な自己をもち、真理を直観するあらゆる清浄な聖仙と感官を制御したる者(苦行者)たちは、速やかに説明したのである<sup>124</sup>。
- (49) このような不吉な恐ろしいこの世での行為を、ジャージャリ仙よ、(それが)ただ行なわれていたがために<sup>125</sup>完全とされる行為を汝は(正しく)認識していない。
- (50) 根拠に基づいて<sup>126</sup>(人は)ダルマを望むべし。世間で行なわれたことを<sup>127</sup>行なうべからず。そして、このことも聞くべし、ジャージャリ仙よ、私を殴ろうとする者と私を讃える者は、
- (51) 私にとっては、両者とも等しい。なぜならば私には好悪は存在しないのだから。賢者たちは、このようなダルマを称賛するのである。
- (52) なぜならば、適切(な行為)に満ちた(ダルマは)、苦行者たちによって実践され、そして常にダルマに専念する人々によって、完全に見守られているからである。

<sup>114</sup>vāhasampīditā Cs. vāhasampīditāḥ vāhasampīditāḥ

<sup>115</sup>avidhinā Cs. avidhinā, vidhim atikramya, turuṣkabahule deṣe / N. avidhinā kratvartho 'pi hiṃsādoṣavāhā kim utākratvarthety arthaḥ (cf. 中村 [1998] p.600, Note No.44) Duessen: gegen die göttliche Ordnung

<sup>116</sup>bhrūṇahatyāpi Manu 8.317 bhrūṇahā に関し、すべての注釈書は、bhrūṇahā は brahmahā と解釈している。しかし、Manu 4.208 bhrūṇagnāveksitam の注釈に関して、そのような解釈をしているのは Medhāthiti のみである。これに関連して、Hopkins は、「胎児殺し」から「バラモン殺し」への中段階という解釈を提示している (cf.Hopkins[1884]p.103,fn.4)。また Manu 11.248(渡瀬訳では 11.249)には bhrūṇahā があるが、ここでは kullūka 注が brahmahatyā と解している。Hopkins は、当初は胎児がバラモン種であるときのみこの規定が適用された、と推定している (cf.Hopkins[1884]p.360,fn.4)。

<sup>117</sup>kṛṣiṃ sādhu ity manyante Cf.MBh.III.199.19; 原 [1998] p.29 注 24

<sup>118</sup>sudāruṇā Manu 10.84 sadvigarhitā 原 [1998]:p.29 注 24

<sup>119</sup>kāṣṭham ayomukham Cn. kāṣṭham ayomukham, lāṅgalam /

<sup>120</sup>bhūmiśayān Cn. bhūmiśayān sarpādīn /

<sup>121</sup>P. pṛṣadhro gālabhann iva D. vṛṣaṃ gāṃ vā 'labhet tu yaḥ K. vṛthā yo gāṃ nihanti ha vṛṣaṃ gāṃ vālabhet tuyāḥ Ca. pṛṣadhrāḥ ikṣuvākuputraḥ homadhenuṃ hatvā sūdratām āgamad ity itihāsaḥ / Cn. pṛṣadhro gāṃ labhan vṛṣān iva, vyāghrabhrāntīyā nīrṣto bāno gavi patīto, na tu gavi viṣṭaḥ ity arthaḥ / gālabhann iva の語形不明。gāḥ ālabhan の Double Sandhi か、gāṃ ālabhan を短縮したものか。

<sup>122</sup>prajāpatim Cs. prajāpatim, piṛsadr̥ṣam /

<sup>123</sup>P.,D.: prajāsv eva hi K. praśastās te ca

<sup>124</sup>pratyavavedayan Cp. pratyavavedayan pratikūlatayā jñāpitavantah

<sup>125</sup>kevalācaritavāt Cp. kevalācaritavāt, śrutyādyapratipāditatvat / ācaritavam evātra hetur nānya ity arthaḥ /

<sup>126</sup>kāraṇād Ca. kāraṇāt śruteḥ / Cp. śrutyādeḥ /

<sup>127</sup>P.,D.: lokacaritam K. lokam virasam